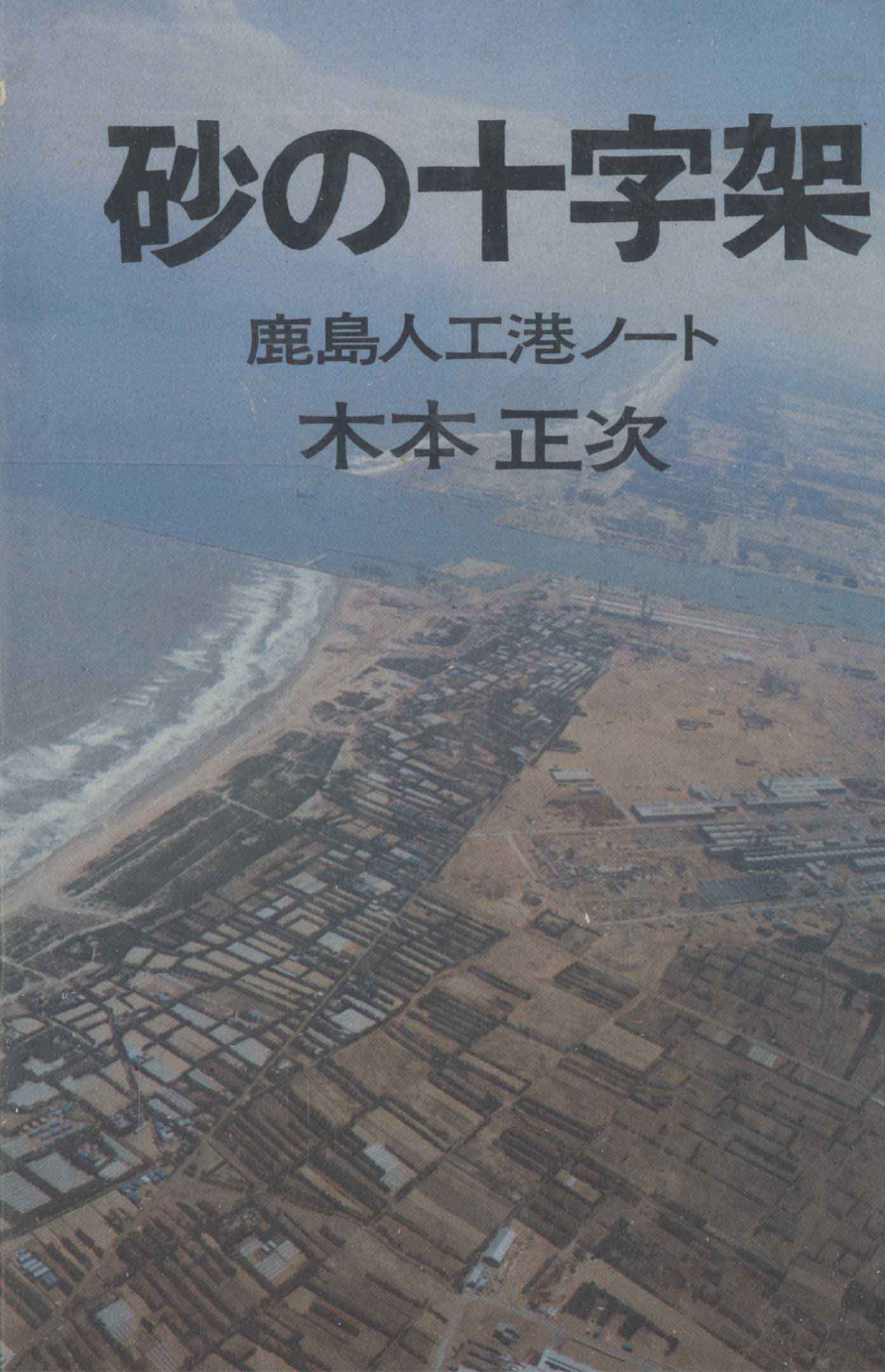
砂の十字架

鹿島人工港ノート

木本 正次



砂の十字架

鹿島人工港ノート

木本 正次

講談社

砂の十字架　鹿島人工港ノート

昭和四十五年九月二十四日第一刷発行

著者＝木本正次

発行者＝野間省一

発行所＝株式会社　講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二

電話東京九四二―一一一一（大代表）振替東京三九三〇

印刷所＝豊国印刷株式会社

製本所＝有限会社　大光堂

定価　五八〇円

©木本正次　昭和四五年

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0093-148418-2253（0）　（文2）

砂の十字架　目次

奇妙な陳情　七
若い知事　二一
港への胎動　二六
七人のサムライ　四〇
予算と用地　四七
前線哀歌　五五
試験堤着工　六〇
企業の接着　七二
頑なな『土』　八六
暗　転　一五一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

妻の立場　一七七
勧進帳　一九三
黒い滞流　二一二
農工両全　二二九
神と王の正義　二四二
建設の季節　二六五
曠野の戦い　二八七
鉄の激流　三〇八
土の十字架　三二二
雲の上の祭り　三二九
あとがき　三六九

装幀　稲垣行一郎

砂の十字架

鹿島人工港ノート

天国は一粒の芥種（からしだね）のごとし。人これを取りてその畑に播くときは、万（よろず）の種よりも小さけれど、育ちては、他の野菜よりも大きく、樹となりて空の鳥きたり、その枝に宿るほどなり。（マタイ伝第十三章）

奇妙な陳情

いまから十年ほど前の――昭和三十六年の新年度が始まったばかりの四月から五月にかけての頃であった。

運輸省とか建設省とか、農林省、通産省、また経企庁、大蔵省といった中央の官庁に、毎日のように或る奇妙な陳情が続いていた。

その陳情は茨城県の役人たちからであったが、決して大臣とか次官とか、局長とかの上級者に対してではなかった。また地方府県からの陳情の通例に似げなく、地元出身の大臣とか衆参議員などを押し立ててのものでもなかった。

陳情される方は、もっぱら各省庁の課長補佐とか計画官とか調査官とか、実務の担当者ばかりだった。せいぜいが課長どまりであった。そして陳情する側も――それは入れかわり立ちかわりの波状攻撃ではあったが、すべてといっていいほどに県の課長、課長補佐とか、また主

査、主幹といった実務担当者たちであった。
彼らは一様に、一枚の地図と、薄っぺらな一冊の謄写版刷りのパンフレットを持ってやって来た。
地図は茨城県の鹿島地方の五万分の一の地図で、その上には、薄い青や赤や茶色や黄の絵の具で、一つの掘込み港湾と、南北相対する一対の蟹のはさみのような大きな防波堤と、そして港を囲む三ヵ所のごく素朴な工場地帯の構図と、思いつきの域を出ない程度の数本の幹線道路とが、殆ど鹿島郡全体にまたがる広い地域にわたって記入されていた。掘込み港はバカでかくて、数万トンの巨船の出入りを可能にするものと思われた。鉄道線路の記入はなかった。
パンフレットには、『鹿島工業地帯造成計画書』といった意味の題号が印刷されてあった。
「これを……どうするというのだね？」
運輸省だけは後述する理由でいくらかニュアンスが違ったが、他の各省庁では役人たちが、例外なく怪訝な表情でたずねた。
「はア、何とかお智恵を拝借しまして……ぜひ鹿島にこうして人工港と臨海工業地帯を造成しようと思うのですが……」
茨城弁特有の、他県人の耳にはかなり押し付けがましく聞こえる発音ではあったが、彼らは一様に丁重な物腰で、内心の誠意を披瀝していった。
「政府にそんな開発計画があるようには聞いていないのだが……いったい誰がやるんだね？」
「はあ、それは県が中心になりまして……」
「県が――？」
中央官庁の役人たちは、驚きの表情で陳情に来た男たちの顔をしげしげと見るのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

「県がやるといったって――地図で見ると随分大きな計画のようだが……すると大臣はご承知なんだね？」
「いえ、大臣にはまだ……」
「じゃあ知事はどうしてるんだね？　知事から大臣や地元の先生方には相談してないのかね？」
先生方とは、地元選出の国会議員たちのことである。
「知事はいま外遊中でして……大臣にも先生方にもまだお話ししてありません。この計画の参考にするために、知事は渡米して五大湖のウェランド運河や、パナマ運河や、ラスベガス付近の人造湖などをいま視察中なんです。ついでに南米に飛んで、この計画の背後地の構想を練るために、ブラジリアの建設を見てから帰国される予定なんです」
「それは雄大なことだ」
あからさまに呆れたといった表情が、中央官庁の役人たちの顔には浮かぶのである。
「雄大なのは結構だが……じゃアこのあたり一帯の土地は、すべて県有地だとでもいうのかね？」
「いえ、それは殆ど民有地です。民有地といっても砂漠のような砂丘地帯が多いのですが……そのために極めて貧しい地元の農民たちの経済解放をしたいといって、知事はこのプランを立てたのですが……でも県有地も国有地も殆ど含まれていません」
「じゃア話し合いはついているんだね？　例えば買収するとか地元が提供するとか――」
「いえ、それも一切まだです」
「それもまだだって！」

呆れを通り越して、役人たちはまるで自分が侮辱されているように感じるのであろう、とうとう腹を立ててしまうのである。
「じゃア君たちは、国の諒解も大臣や国会議員の賛同もなしに、他人の所有地に勝手に図面を描いて持ち込んで来たのかね！　まるで気違い沙汰じゃないか」
「はア、ですから何とかお智恵を拝借いたしたいと……」
「帰ってくれ給え。僕だって忙しいんだ。気違いの付き合いはそうそうしてられないんだ」
「はあ、それは判っておりますが……しかし……」
人によっては頭を掻き、またお辞儀だけはぺこぺこする者もいるけれど、水戸っぽの陳情者たちは誰も彼も一徹なようで、容易に引きさがろうとはしないのであった。

そんな茨城県からの無法ともいえる陳情が、官庁街のひそかな噂のタネとなっている五月下旬の或る日であった。
例によって二人の県職員が建設省に陳情に来ていたが、至るところで冷笑を買って、とうとう諦めて帰ろうとしていた。
当時の建設省は改築前の有名なボロ庁舎で、折りから退庁時となって、用務員がチリンチリンと古風な鈴を鳴らしながら歩いていた。
二人のうちの一人は、帰る前に薄暗いトイレに入って小用を足そうとした。すると隣に立って同じく小用を足していた大男が、その男の横顔をしげしげと見ていたが、やがて用を終わって男性自身を納めながら、
「君、国松君じゃないだろうか？」

遠慮がちにたずねた。国松と呼ばれた男はふり向いたが、相手の色の白い顔と桁はずれに大きい耳が特徴で、それが誰であるかがすぐに判ったようであった。

「あッ、下河辺さん！　下河辺という人が建設省にいるとは聞いてたけど、まさかあんたとは気がつきませんでした。お元気でしたか！」

男はカン高い声をあげた。茨城県の鹿行開発推進事務局の主幹である国松義輝であった。

「元気かって、君こそ元気だったんだねえ！　誰かに君は広島で原爆で戦死したと聞いて、すっかりそう思い込んでいたんだが、生きていたとは何しろめでたい！」

「まアどうやら。このごろはこうやって毎日のようにここへお参りに来てますよ」

「何の用だね？」

「実はですねえ――」

呼びかけた男は建設省の新鋭官僚として世間にも知られている下河辺淳で、当時計画局総合計画課の計画官であった。二人は旧制の水戸中学の同級生で、国松は剣道部の、下河辺は蹴球部の選手で、同じように暴れん坊だった。昭和十六年の卒業だから、ちょうど二十年ぶりの意外な再会であった。

「実は……私は軍隊から帰って十年余り総理府の技官をしていたのですが、感ずるところがあってつい先日、この五月一日から茨城県に移ったホヤホヤなんですよ。それで……用件というのはこの鹿島臨海工業地帯のプランなんですがねえ」

昔は同級生だったといっても、いまは相手は名だたる中央官僚である。同じ役人稼業の国松はそこは心得ていて、便所から廊下に出たばかりのところに立って、丁寧な言葉で図面を拡げて説明にかかろうとした。

「いかん、いかん！」
下河辺は、眉をしかめて手を振った。
「そのプランは聞いている。君は新米だそうだが、僕は県のほかの連中から陳情を受けて知っているんだ。しかし……金もない県が他人の土地に勝手に図面を描いて……そんなことができると思っているのかね」
「しかし……」
「しかしも何もないよ。非常識きわまるよ。君んところの知事は、頭が少しおかしいんじゃないのかねえ」
下河辺はずけずけといった。
国松がしょげていると、下河辺はふと笑顔になって、
「しかし国松君、気違いじみた鹿島開発などにはお相手できないが——その件には一切ふれない約束にして——君が生きていたことは何にしてもめでたいよ。どうだ、お祝いにやるか——」
手を上げて、コップを呷(あお)る手つきをした。
「結構ですねえ。仲間が一人いますが、いいですか」
「ああ、いいとも」
国松は同行しているもう一人を手招いた。橋本章(あきら)といって、同じ茨城県の総合開発事務局の企画係長で、国松と同じ鹿行開発推進事務局の勤務を兼ねている。三人は下河辺の馴染みの料亭へ行った。
「ところで……どうだったのだ、原爆は？」

乾杯が終わると、下河辺は白い血色のいい豊かな頬の肉を硬ばらせて、心配そうにたずねた。
「いやあ、それがまたとんだへまでしてねえ」
国松は、下河辺よりは小柄だが、精悍な、肉づきのいい赭ら顔をしている。その、余り大きくない目を愛嬌よく細め、頭を掻きながら、
「当時私は少尉で、広島に勤務していたんですよ。原爆の八月六日には、兵隊を連れてレーダーなどを疎開するための壕掘りに、一〇キロほど離れた宮島に行っていたんです。すると、突然広島の空がピカリと光ったかと思うと、巨大なキノコ雲の下で一瞬全市が白い煙に包まれ、やがて各所から火の手の上がるのが見えたのです」
「うん――」
水戸中学から旧制の多賀工専（現茨城大学工学部）金属工業科に学んだ国松は、学徒出陣の第一陣として、繰り上げ卒業で昭和十八年の末に水戸の工兵部隊に入り、満州勤務から陸軍兵器学校を経て、その頃は同校広島分校の教官をしていた。
「むろん原爆などとは誰も知らず、兵器庫か火薬庫の爆発だろうと思ったのです。私は将校斥候を命ぜられ、兵隊二個小隊ほどを連れて大発（発動機船）で海から広島に向かったんです。
ところが着いてみると、広島は廃墟で、瞬間に蒸発したのか、街には道路とランカンのなくなった橋しか残っていず、その橋の上には無意識に水を慕うのか、トマトのように紫色に顔がはれ上がって、目の見えなくなった人たちが群がっていて、それがドボンドボンと川にこぼれ落ちるのです。やがて黒い雨が降って来て、徒歩で広島に帰った私の部隊の残りの者などはずぶ濡れになって、後日半数以上が原爆症で死んだのですが……」
「ふーん、悲惨きわまるねえ」

下河辺は唾を呑んだ。
「そうですよ。人間として許せない、神を冒瀆する所業だと、いまでも思っています。――それからわれわれは一ヵ月ほど広島の跡始末にとどまったのですが……おかげで私自身も放射能にやられたのか肝臓を悪くし、全身河豚みたいにふくれ上がって、半死半生で一年間……」
「大変だったんだねえ。よく助かったねえ――それを祝して乾杯ッ！」
下河辺がわざと陽気にいってコップを挙げるので、国松もコップを挙げて下河辺とカチッと鳴らしてから、溢れるビールを威勢よく一息に飲み乾した。
「まア、田舎に帰って破れかぶれで寝てばかりいたので、どうやら命だけは取り止めたわけなんです。それから暫くして、総理府の技官に就職したのですが……実は……」
国松は、橋本の注いでくれたビールをさらに一気に飲み乾すと、目を上げてじっと下河辺を正面から見つめた。
（いっそいま、何も彼も全部ぶちまけてしまおうか！）
国松は考えるのであった。――下河辺は鹿島のことは語るなと釘を刺しているが、この、一部では地域開発の教祖さまなどと仇名されて、それは国松の耳にまで入っている新鋭のビジョン官僚が、あの痩せこけて耳ばかり異様に大きかった親友・下河辺少年の成長した姿だと判ってみれば、いずれは自分が鹿島の陳情に押しかけることになるのが目に見えている。それならば、いっそいま、ここで、自分の信念や情熱を語っておく方が男らしいのではあるまいかと、国松は腹を決めるのであった。
「実は、何だ？」
下河辺が促した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook